「部落差別解消推進法」（H 28.12.16）　差別のない社会の実現をめざして成立しました。一人一人が人権問題を正しく理解し，正しく伝えていくことが大切です。

十島村教育委員会だより　令和２年１２月号

さわやかトカラ情報

南北１６０㎞

「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL　099-227-9771

コロナに明けてコロナにくれる

十島村教育長　有　村　孝　一

毎年恒例の、今年一年をを漢字一字で表すと何でしょうか。ということで、先日京都の清水寺で発表がありました。選ばれたのは、「密」でした。大方の人が予想通りではなかったかと思います。私もそうではないかと思っていた一人です。

この一年間何回ともなく聞いたり使ったりしてきた「三密」（密集・密閉・密接）を守りましょう。という掛け声がなかなか思い通りにいっていない現状があるのではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症は、新型コロナウイルスである“SARS-CoV2”による感染症のことです。WHOはこのウイルスによる感染症のことを“COVID-19”と名付けました。2019年12月以降、中国湖北省武漢市を中心に発生し、短期間で全世界に広がりました。

今年を振り返ってみますと、３月からずっと「新型コロナウイルス」の話題でもちきりでした。３月の休校から始まり、フェリーの乗船制限、島での感染予防対策による検温や２週間前からの健康チェックなど、感染のリスクを最小限に抑えられるようにと対策を考えてまいりました。

学校でも、卒業式や入学式、運動会、文化祭、学習発表会などマスクやソーシャルディスタンスに気をつけながら、行事を実施することができました。

また、小学校の修学旅行と中学校の職場体験活動は6月に実施予定でしたが、修学旅行は県内で10月に何とか実施することができたくさんの思い出を作ることができました。職場体験活動はそれぞれの島で行ってもらいました。

12月に入りコロナウイルス感染症は、ますます拡大してきています。冬休みまであと一週間程度となりました。それぞれ皆さん計画があると思いますが、今年の年末年始は例年とは違うということを、皆さんで理解していただき安心安全にそして健康に過ごしていただきたいと思います。出水市や曽於市の学校でもコロナウイルス感染症の発生があります。いつどこで起こるかわかりません。引き続き感染防止対策である換気、マスクの着用、手指の消毒の徹底に努めていただきたいと思います。

１月からの１年間の中でコロナ関係を取り上げました回数が4回になりました。それだけコロナウイルス感染症に影響を受けているということです。来年こそは心配のない良い年になることを皆さんとともに祈りたいと思います。

年末や正月に各島でおこなわれる伝統行事についても、無事に滞りなく行われることを念願しています。なかなかゴールの見えない状況ですが、皆さんであともう少しの我慢に努めていただきたいものです。よい年をお迎えください。

中学生の「税についての作文」
特別賞「鹿児島税務署長賞」
宝島中学校３年　　福島　嘉津穂

「こんにちは。宝島中学校の新聞部です。今回は、インタビューに答えてくださり、ありがとうございます。」私は、ここ宝島中学校の新聞部に所属している。今回は、コミュニティセンターで働く役場の出張員さんに村の新型コロナウイルスへの対応についてインタビューする。私の住んでいる宝島は、本土から、三百キロ以上も離れた離島だ。そんな場所で、もし感染者が出たら、島内はパニック状態になってしまうだろう。それを防ぐために、今、村はどんな対策をしているのか。これが、今回のインタビューの趣旨だ。インタビューする前は、村がどんな対策をしているのか、あまり知らなかった。ニュースもあまり見ないので、マスクを配ったり、呼びかけをしているだけだろうと思っていた。ところが、インタビューを行ってみると、村も、様々な対応策を出していることを知った。観光客の受け入れの停止、新型コロナウイルスによって収入が減少した人への給付金の支給、子育て世帯への支援金、もし、村内で感染者が出たときに、治療費を助成することも考えられていた。こうなってくると、やはり必要となってくるのはお金だ。マスクだって空から降ってくるわけではない。では、どうやって村は、コロナウイルス対策のためのお金を出しているのか、その答えは、勿論、税金である。税金は、給付金やマスクだけに使われるのではない。たとえば、島と本土をつなぐ定期船フェリーとしま２がある。もし、島内で、感染者が出たり、食料がなくなったりした時に、フェリーとしま２が運航しなければ、医師も食料も島には来られない。このフェリーとしま２は、まさに私たちの命綱なのだ。それだけではない。もし、島内で感染者が見つかり、本土に運ぶことになったとしよう。そうなると、船は、毎日運航していないので、ドクターヘリを使うことになる。このドクターヘリでの運送料を賄ってくれるのも税金である。このように、恐ろしい「イフ『もし』」が起きた時に、私たちを助けてくれる。そして、こういった「イフ」を起こさないように、事前に対策を施すのも、税金の大きな役割である。では、この税金を払っているのは、誰か。それは、私たち自身だ。つまり、私たち一人一人が、社会を守る大きな役割を持っているのだ。今回のインタビューを受けて、税金の使われ方について考えてみた。勿論、税金は、私たちの生活を守り、よりよくしていくために使われるべきだ。だが、その為には、私たち自身が納税意識を持ち、一人一人の役割を果たすことが大切だ。今後のコロナウイルス対策についても、私たちの生活を私たちが守る為に、納税の義務を果たしていきたい。

おめでとうございます

第４回九州電力絵手紙コンクール
学校賞　中之島中学校
入　選　中之島中１年
羽生　深理

【シリーズ　新聞に投稿】

（令和２年１０月１５日南日本新聞「若い目」掲載）
中之島小学校４年　久木山　陽

ヘリコプターでひなん

台風十号が十島村へ接近するという予ほうだったので、自えいたいのヘリコプターで鹿児島市へひなんをしました。初めての経験でヘリコプターに乗るのはドキドキしました。また、お父さんが１人で中之島に残るのですごく心配でした。

鹿児島市に着き、車でいとこの家に行くとおばあちゃんが待っていました。おばあちゃんの顔をみるとほっとしました。

その日の夜は、外でガシャンと大きな音がなったり、電気がチカチカと短い時間、てい電したりしました。島で電気の仕事をしているお父さんがまた心配になりました。１週間後にようやく島にもどり、どしゃくずれで、がや人がひがいを受けてなかったと聞き、安心しました。そして、お父さんに会うとそれまでの不安が吹き飛びました。ひなんのとき、お母さんはばたばた忙しそうにしていました。その姿を見て、これから自分のことはできるところまで自分でやって、お母さんを手伝いたいと思いました。

（令和２年１１月２０日　南日本新聞「若い目」掲載）
平島中学校１年　新田　真央

頑張った白組

運動会で、一番うれしかったことは、短距離走で２位になったことです。予行練習で、本気で走りましたが、残念ながら３位でした。とっても悔しかったので、計画を立てて友達と朝練習を続けました。短距離走の他にも、リレーや団体種目の練習も作戦を立てました。そのおかげで、とても満足できる結果になりました。短距離走と同じくらいうれしかったのが、応援の部での優勝です。予行練習の時、赤組がとってもカッコよかったので、もうだめかもしれないと思っていましたが、最後まであきらめずに、白組みんなで練習を続けました。結果発表の時、うれしすぎて夢かと思ってしまいました。残念ながら、競技の部では優勝できませんでしたが、本番までの時間が、とても楽しかったです。白組の一員になれて、本当に良かったです。来年も頑張ります。

（令和２年１２月５日　南日本新聞「若い目」掲載）
宝島小学校６年　尾家　文都

伝統の楽器「三線」

ぼくの住む宝島には「三線」という楽器がある。元々は中国の楽器だったものが沖縄や奄美に伝わってきた。楽器の存在は知っていたが、実際には見たことがなかった。十一月に芸術鑑賞会があり、弦楽器の楽器体験をした。その中で三線が一番心に残った。初めて見るその楽器は、三味線によく似ていた。弦は３本、胴はニシキヘビの皮でできている。見た目はプラスチックみたいだけれど、触ると表面がざらざらしていた。

音を鳴らしてみると、体中でビーンと伝わってきた。教えてくださった地域の方は「プラスチックの楽器もあるけれど、値段も音も違うよ。」と話していた。

地域に古くから伝わる「トカラ観音主」という歌を三線で演奏してくれた。この歌や三線にふれたことで、ぼくは宝島の音楽をもっと知って、宝島から発信していきたいと思った。

シリーズ・・・十島村で学ぶ

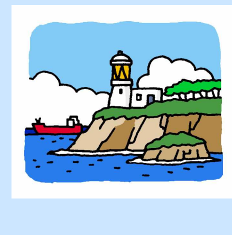
【宝島で学ぶ】「少人数で盛り上げた運動会」」
口之島中学校２年　松田　紘明

口之島で競技する運動会は、今回で、４回目でした。今年は、今までの運動会とは、２つの意味で大きな違いがありました。１つ目は、コロナウイルスの影響です。今回は、島外の人などは呼ばずに、自分たちと関わりの深い人たちとの実施でした。いつもとは違い、人数が少なく、静かな感じがしました。でも、僕たちの出場の機会が大きく、すこしでも盛り上げようとみんなで協力しました。また、いつもあいさつや言葉をかわす島民のみなさんとの競技だったので、声かけや応援がしやすかったです。競技中も一生懸命応援し、盛り上げることができました。「人数が少なくなっても、同じように盛り上げることができるんだなあ。」と思いました。２つ目は、応援団長になったことです。初めてのことだったので、応援練習で何をすればいいのか分からず、上手く指示を出すことができませんでした。少しずつやるべきことが明確になり、人前で話すことにも慣れ、団員をまとめることができるようになりました。本番では、負けてしまいましたが、練習通りにエール交換や応援合戦をすることができました。

来年こそは、勝利をつかみたいと思います。持久走大会を始め、まだまだ、様々な学校行事があります。「体力づくり」に懸命に取組み、強い自分にチャレンジしていきたいと思います。

【小宝島小・中学校からのメッセージ】
教頭　萩原　秀一郎

「１５の島立ち」この言葉が本村にはある。本村を卒業し，子どもたちは，島から離れ，親元から離れ，自らの夢実現に向けて自らの力で切り拓いていくことになる。小宝島では，島民全員が家族です。大家族の，皆が子ども一人一人に愛情を注ぎ，いつでも子どもたちを支える環境にある。そういった中，本校の卒業生の中で，現在，親元を離れ高校生活を過ごしている卒業生がいる。高校入学当初は，島を離れ，環境が変化し，自らの事を全て自分で行っていくことに戸惑いを感じ過ごしていた。しかし，甘えが許されない環境の中で自らの力で幾度とない試練を乗り切った卒業生は，現在，荒波を超えて,真の独り立ちに向けて全力で高校生活を過ごしている。「１５の島立ちの教育」この教育の根底にあるのは，やはり，児童生徒の未来を見据えた学校教育と保護者・里親・寮監，地域の方々の豊かな愛情が「１５の島立ち」を支えていると十島村で過ごした４年間で感じる。



『教職員仲間であるあなた』への　私からのメッセージ

新型コロナ感染症対策を行いながら，皆さんの協力で安心安全な環境を築きながら，制限された状況でしたが，「一期一会」多くの方々と出会うことができました。そして，児童生徒の笑顔や頑張る姿を応援して頂きました。心から感謝申し上げます。